

歴史を感じながら歩く！
パワースポットの地伊豆山!!

伊豆山温泉 歴史探訪

縁結び
天下取り
強運



1 伊豆山神社 (いずさんじんじや)

頼朝と政子のロマンスに始まる縁結びの神。伊豆山神社の始まりは、その昔、相模国唐浜に流れ着いた神鏡を松葉仙人が伊豆山に祀り、走湯権現(はしりゆごんげん)と伝承したといわれています。その後、蛭ヶ小島に流された源頼朝が約20年にわたる流人生活の間、伊豆山走湯権現の別当密厳院(みつごんいん)の僧、阿闍梨覚淵(あじやりかくえん)に師事。走湯の神威と衆徒の勢力を頼みに源氏再興の旗を掲げ、鎌倉幕府の開幕後も伊豆山神社を関東の総鎮守として厚く信仰。箱根権現と走湯権現をめぐる二所詣を行なったことでも有名です。また頼朝とその妻、北条政子との結婚にまつわる逸話から伊豆山神社は縁結びの神として知られるようになり、今日でも多くの参詣者が訪れています。



2 雷電社 (らいでんしゃ)

創立年代は不詳ですが、吾妻鏡に「光の宮」と別名があり、鎌倉幕府三代将軍源実朝が再興し、そののち、暦応四年に足利氏が、慶長十七年に徳川二代将軍秀忠が改築、現社殿は昭和十年に内務省により改築されました。政治を司り導く神として崇められています。

3 結明神社 (むすぶみょうじんじや)

久地良山(日金山)に大杉有り、その中より一女一男が出生した。時に初島・初木神社の御祭神初木姫が二子をとって養育てたが、たちまちに成長し、一女を日精、一男を月精と号した。後に二人は夫婦となり日金山に仕えて「伊豆権現氏人之祖」となったと云う。御祭神は男女の縁結びを叶える神として崇められています。

4 役の小角社 (えんのおづぬしゃ)

634年、大和の国葛木上郡に生まれ神仏両道に涉り行を積み深く学を究め孔雀咒法を修習、奇異の験術を証す。日本国中の名山高山を開き登り、修験道の祖と仰がれています。

5 腰掛石 (こしかけいし)

古くから縁結びの祈願所として名高い伊豆山神社。頼朝と政子が恋を語った腰掛石です。恋の始まりを祈る、進行中の恋の成就を願う、恋人との絆を深める新しいスポットです。

6 柳の木 (なぎのき)

社殿の両脇にはご神木、「柳(なぎ)の木」があります。柳の葉は、その葉脈の形から容易に裂けません。このことから柳の葉は、男女の仲が裂けない、願いごとが叶う、と古来よりいわれてきました。政子は、ナギの葉を鏡のしたに敷き、頼朝との愛を祈ったといわれています。

7 明星の井戸 (みょうじょうのいど)

仁和元年(885年)天台宗の安然(あんねん)という僧侶が井戸の近くに住んでいました。ある夜、一心にお経を唱えていると星がお経に誘われたように、長い尾を引き、井戸の中に落ちました。その井戸からキラキラとした綺麗な水が溢れたといわれたことから「明星の井戸」と呼ばれています。

8 子恋の森

伊豆山神社の裏手に広がる「古々井の森」または「子恋の森」と呼ばれる森は、古くよりホトトギスの名所で、歌枕にも詠まれてきました。拾遺歌集には「ここにだに つれつれと鳴く 郭公まして ここの森はいかにぞ」という歌があります。また、枕草子には、「社はごひの社」として登場します。

9 白山神社

伊豆山神社の裏山500m上の巨岩が連なる場所に、菊理媛命を祀る広さ4m四方の社殿があります。東国一帯に疫病が流行した天平元年(729)夏に、白山の神威によって祈願された修験者の神域で、現在でも森林におおわれた一帯は神秘的な雰囲気があります。

10 伊豆山郷土資料館

伊豆山神社の境内にあり、社宝や神社にまつわる貴重な史料を数多く展示しています。国指定の重要文化財が2点あります。ひとつは、後奈良天皇が万民を疫病から救いたまえと祈り、般若心経を手写したと伝わる「紺紙金泥般若心経」。もうひとつは、平安時代のものといわれる像高212.2cmの「木造男神立像」で、わが国の神像の中では最大の作例として注目されています。ほかに、伊豆山が強大な勢力を誇っていた時代の古絵図や、江戸時代の伊豆山神社祭典を描いた絵馬も展示されています。

11 般若院 (はんやいん)

真言宗の古刹で、山号を走湯山といひます。明治元年まで伊豆山神社の境内の続きにありました。かつては真言宗伊豆の総元締で、関東一円に大きな勢力を持ち、神仏離令により取り壊され、神社西側の現在地に移されました。

12 御獄社 (おみたげさん)

室町時代にはすでに造られていた社で、本社は長野県王滝村にあります。御岳山を崇敬する山岳信仰の社でもあり、伊豆山の修験者がその分身を譲り受け、伊豆山の御獄の森の中に小さな社を造り安置したのが始まりといわれています。もとは岸谷バス停の上の森の中にありましたが、伊豆山神社線道路拡幅によって、昭和45年頃、現在の地に移されました。

13 斎藤別当五輪塔 (さいとうべっとうごりんとう)

この地はかつて走湯権現全盛時代の別当寺で、密厳院の旧地であると伝えられています。寺山の畑の一隅には100基を超える五輪塔群のほか、木曾義仲を養育し、のちに平塚方について戦死した斎藤別当実盛の墓もあります。斎藤別当の子、五郎、六郎の別府兄弟は、父の遺骨を伊豆山の密厳院の境内に埋葬したといわれています。

14 横道地蔵 (よこみちじぞう)

文化5年(1809)、伊豆山の般若院東蔵坊と村人が道しるべを兼ねて建てた地蔵尊です。ここは旧小田原(根府川)街道の通り道で、源頼朝や徳川家康をはじめ、諸大名や一般の旅人も、江戸や鎌倉から熱海へ来るときには必ず横道地蔵のそばを通っていました。台座の右下には「右おだわらみち」、その斜め上の小さな地蔵尊の台石には「左ひがねみち」の刻字があります。

15 走り湯 (はしりゆ)

万葉の昔からこんこん湧く豊富な湯量特徴。日本三大古泉のひとつといわれる走り湯が発見されたのは、1300年前の万葉時代までさかのぼります。伊豆山温泉は、この走り湯を中心に発展してきました。「伊豆国風土記」にも「尋常の出湯に非ず、一屋に二度、山の岸の窟の中に火焰の隆に発りて出す。其温泉甚だ燐列し。沸湯を鈍らずに桶を以てし湯丹に盛りて身を浸せば諸々の病悉く治す」と書かれています。平安時代の末には、かたわらに役の行者堂があり、修験場であったために、一般人は近寄れませんでした。やがて鎌倉時代の末頃に、広く入浴できるようになったと伝えられています。ここの湯は「研ぎすまされた湯」といわれ、無色透明に近く臭いもなく、入浴しやすい温泉です。70℃近い湯が毎分170リットル湧き出しています。

16 走湯神社 (はしりゆじんじや)

奈良時代に発見された走り湯は、平安時代の書「梁塵秘抄」に修験道の靈験の地として記されています。神様の湯とあがめられ、温泉の守り神として社が建立されました。この神社にかかる扁額は、三島大社の宮司、矢田部氏によるものです。

17 逢初橋 (あいぞめばし)

古代、伊豆山沖で難破し初島に漂着した初木姫が伊豆山へ渡り、伊豆山彦命と初めて出会った場所といわれ、のちに逢初橋と呼ばれるようになりました。若き頼朝と政子が初めて逢った場所もここであるといわれています。古文書には、岸谷バス停のところにあった御獄社の森の下に架かっていた橋が本当の逢初橋であると記されており、現在の赤い橋は明治13年、国道として建設されたものです。

18 勝負事祈願! バクチの木

伊豆山海岸に向かう途中の崖に「通称バクチの木」があります。昔より、この葉をのばせ勝負事をすると言われています。バクチの木は崖の中腹にあり、通常では葉っぱをとることができません。又、落ちた葉っぱをお守りにしても、勝負運が落ちるといわれます。では、どうする。伊豆山散策でバクチの木の近くに来たら、勝負事に勝つよう心の中で、お祈りしてみればいかがでしょうか。ご利益があるかも!

※バクチの木は崖の中腹です。場所から危険ですので道からみただけにしてください。必ずおまもり下さい。不測の事態がおきましても責任は負いかねます。

19 秋戸郷跡 (あきとのごう)

秋戸郷旧跡。国道135号・伊豆山参道入口の500mほど南の傾斜地に石碑が建つ。石橋山の戦いで敗れた頼朝は、安房国へ逃れました。この間、北条政子は、平家の手から逃れるために、秋戸郷で隠れていました。約2ヶ月後、政子は鎌倉に入った頼朝と再会したとのことです。

20 逢初地蔵堂 (あいぞめじぞうどう)

逢初橋のたもとにある地蔵堂です。元暦元年(1184)、源頼朝の長女大母の病氣平癒を願った母政子が、経文を書いた紙を練って作った地蔵尊を逢初地蔵堂に祀り、延命祈願をしたと伝えられています。この延命地蔵尊は2体つくられ、1体は逢初地蔵堂に、もう1体は頼朝旗揚げのとき、走湯山常行堂に納められました。

21 身代り不動尊 (みかわりふどうそん)

川崎にある身代り不動尊の熱海別院で、京都醍醐寺当山派の修験道の不動尊が安置されています。伊豆山権現の別当院、密厳院も足利時代の別当職が醍醐寺派であったので、伊豆山との関わりもあるといわれています。

伊豆山温泉を満喫する為の三カ条

①ハイヒール履くべからず
伊豆山温泉歴史探訪スポット周辺は綺麗に舗装された道路ばかりとは限りません。坂道や砂利道、歩き慣れない道もあるかもしれません。スニーカー等の歩きやすい靴と動きやすい服装が一番!

②手ぬぐい持つべし
神社の参道や石段・山道などを歩くときもいい運動になります。途中には足湯もあります。汗をかいた時のため・足湯に浸った時の足ぶきにタオルや手ぬぐいを持参しましょう。

③ごえんを持つべし
全国でも屈指のパワースポットの地、伊豆山。そこには歴史に裏打ちされる神社・仏閣が…。お参りしてご縁を! 足湯に浸りながらご縁を! お店の人と会話、街行く人々との会話でご縁が! ご縁を結んでお持ち帰り下さい。きっといい事ありますよ。

22 日枝神社 (ひえじんじや)

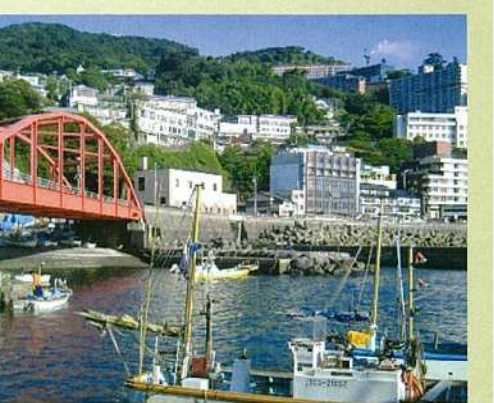
滋賀の日枝神社から分祀された稲村集落の氏神で、竹林の奥にある階段を上ったところにあります。日枝神社にある扁額は、昭和26年1月1日、伊豆山稲村大洞台に住んでいた志賀直哉宅に阿部能成や谷崎潤一郎が年賀に訪れた際、志賀直哉の口利きによって阿部能成が扁額の表に社名を、裏に年月と署名を書き残したものです(管理上、別に保管)。

23 興亜観音 (こうあかんのん)

昭和15年(1940)2月、陸軍大将、松井岩根の発願によって、日中戦争における日中両軍の戦没者を怨殺平等に等しく忌慰、供養するために建立されました。中国の土を使った高さ3.3mの観音像は、堂側露座に安置されています。本堂には観音菩薩が安置され、右に日本軍、左に中国軍戦死者の位牌が対等に並べられ、天井や壁面には日本画壇を代表する画家による絵が描かれています。また、ここからの眺望は、伊豆山随一です。

24 日金山 (ひかねさん)

応神天皇二年(271年)伊豆山の浜辺に、光る不思議な鏡が現れました。鏡は波間を飛び交っていましたが、やがて、西の峰にとんでいきました。その様子は日輪のように見えたので、日が峰と呼ばれ、やがて日金山と呼ぶようになりました。同四年(273年)松葉仙人が、この光る不思議な鏡をあがめ、小さな祠を建てて祀ったのが、開山と伝えられています。推古天皇の頃(594年)走湯権現の神号を賜り、その後、仁明天皇の承和三年(836年)甲斐國の僧、賢安が、日金山本宮から神霊を現在の伊豆山神社のある地に遷したといわれています。(走湯山縁起云々) 鎌倉時代は、源頼朝の篤い信仰に支えられ、現在本尊として祀られている延命地蔵菩薩像も、頼朝公の建立によるものです。地蔵菩薩は、地獄に其の身を置いて、地獄で苦しむ者を救ってくれる仏であることから、死者の霊が集まる霊山として篤い信仰があり、今も尚、春秋の彼岸には多くの人が登山して、神仏や先祖供養のために、卒塔婆供養をしています。



伊豆山温泉観光協会
伊豆山温泉旅館組合
TEL.0557-81-2631
FAX.0557-81-2496
熱海市田原本町9-1 熱海第一ビル地下1階
URL <http://www.izusan.com> E-mail info@izusan.com